

# 農林害虫防除研究会 News Letter No.5

2000年6月30日

研究会所在地：名古屋大学大学院生命農学研究科環境昆虫学教室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TEL:052-789-4032

ホームページ：<http://www.affrc.go.jp:8001/agroipm/narc.html>

## 巻頭言

### たかが防除されど防除

古橋嘉一(静岡県柑橘試験場)(本会会長)

このたびの役員改選により、2000年度からの2年間会長を務めることになりました。会員の皆さんのご協力をお願いする次第であります。

本会がスタートしてから宮城県における大会は第5回目の大会となります。第一回の大会に先駆けて開催した1995年の静岡プレ大会の参加者は約60名でしたが、毎年増え続け、第4回大会では300名近い参加者となっております。1999年現在の会員数は302名で、その内訳は、農薬会社関係114名、地方試験場・防除所119名、農水省20名、大学20名、全農などの団体関係20名、その他9名となっております。全国各地からいろいろな分野の人達が参加しています。

本会の設立の目的は、すでに既刊のニューズレターで何人かの方が述べています。応用科学(Applied Science)としての農業における害虫研究は、虫の同定や生態の解明、害虫を取り巻く環境条件等幅広い分野にわたっていますが、行き着く最終的な目的は害虫防除ということになります。これまで、害虫防除に関する研究は「ぶっかけ試験」と称して軽視されている傾向があり、学会の大会での講演発表も少なくなってきました。しかし、

農業現場の農家は作物に被害を及ぼしている害虫をどのように防除するかスキル(技術)を求め、大変な苦勞と努力をしています。そこで、もっと害虫防除研究の重要性や正当性、技術開発の妥当性等を多くの分野の人達が参加して議論出来るような場としての研究会ということでのスタートでした。そして、すでにいくつかの害虫に関する学会や研究会があるわけですので、従来の学会や研究会とは違った研究会を目指そうということでした。

産官学の一体となった研究の重要性がよく指摘されます。この場合の、農業における「産」とは農薬メーカーや農業機械、肥料会社はもちろんですが、農業者も含まれているはずですが、農家が参加している学会や研究会は私の知る限りほとんどないのではないのでしょうか？

害虫防除は誰がやっているかとなるとほとんどの場合、農家がやっているのが現状です。そして、それを指導しているのは農協の技術員や普及員です。したがって、害虫防除における産官学の一体となった研究会といえば、これらの人達を含めた害虫防除に関わるすべての分野の人達の参加が理想的な会員構成と考えています。この研究会ではその理想を求

めて、大学や国公立、民間の研究者とともに、実際に防除をやっている農家の人達やそれを指導している農協の技術員や普及員の参加を目指しています。

害虫防除に求められるスキル (Skill: 技術) は、害虫の同定から始まって、害虫の生態、関連する天敵などの生物相の把握、農薬の選択、選択された農薬の特性、散布方法、散布後の周辺環境への影響など多分野にわたるスキルが必要です。そして、実際に防除を実施する農家にとって、害虫防除に求められるのはいろいろな分野の総合化されたスキルであり、それを使用したことによる経済効果です。我々研究者は害虫防除のスキルについては、実際に防除をやっている農家の人達がどのように防除を行っているかの実態をよく知ったうえで、農家の目線にあった、農家の人達がどの程度まで「使える」「使いこなせる」スキルなのかを知っておく必要があるのではないのでしょうか？ 研究結果の本当に優れたスキ

ルは農家に普及したスキルと考えています。我々の研究分野は数多くあり、農家も多様化し、研究結果のスキルが全ての農家に受け入れられることは困難です。しかし、我々研究者が研究を進めていく過程で防除を実際に行っている農家や指導している技術員と議論をし、その結果が研究に反映されるような機会が得られれば、研究成果のスキルは容易に普及するスキルとなるのではないのでしょうか？

現在、この研究会にはいろいろな分野と研究機関の人達が参加していますが、さらに、実際に防除を行っている農家の人達やそれを指導している農協の技術員、有機農業も含めいろいろな防除手段で害虫防除を行っている人達も参加することを希望しています。そして、多くの分野の人達がこの研究会を通じて、害虫防除を議論していけば、その結果は、我が国の害虫防除技術への大きな提言になるものと信じています。

## ニュース

### 水稻育苗期は虫屋さんは暇なはずなのに

高岡誠一(福井県農業試験場)

ここ数年、米については品質重視の流れを受けて斑点米、乳白米などが大きな品質低下の要因としてとり上げられ、我々虫屋にとっては肩身が狭い。穂いもちなどは減収という点では重要な病害であるが、少々発生しても騒がれることは少ないようだ。稲の収穫に入ると頻繁に呼び出されるのは斑点米に係る虫屋ばかりである。しかし、水稻の育苗期だけはカビや細菌による苗立枯病などの発生で病理の人たちが大忙しになるのが常であった。

しかし、3、4年前から変わってきた。というのは、苗立枯病の持ち込みに混じって信じ

られないような虫害の持ち込みが急増しているからである。例えば、「根の張りが悪いので見て欲しい」という農協育苗センターからの電話があった。どうせ、病気か、水管理が原因だろうと思っていたら、現物をみてビックリ。何と、キリウジガガンボの幼虫が育苗箱の底から内部へ侵入し、根を食害しているのであった。発生地へ行って並べてある育苗箱を持ち上げてみると、箱の裏側には、箱底の穴に頭を突っ込んでぶら下がっているキリウジガガンボの幼虫が1箱に数十頭もいるのである。

また、「苗が暴食されていて、よく見るとイ

モ虫がいる」と普及センターから連絡があった。『そんなのネズミか何かには食べられたところに、たまたまイモ虫がいたのさ』などと思いつつ現場へ行くと、またまたビックリ。イモ虫というのをよく見ると、何とアワヨトウではないか。しかも、育苗ハウスの中に散在していて、見事な大食漢ぶりを発揮している。福井県のような積雪地帯で一体アワヨトウな

ど、どこで越冬したのか謎である。過去に育苗期にアワヨトウによって被害を受けた記述は本県ではないのである。

異常気象や地球の温暖化が影響しているのか、とにかく驚かされる事が多くなってきた。みなさんの周りではこのような事はありませんか？

## 普及現場から見た生物的防除の普及

渋谷俊一(宮城県本吉地域農業改良普及センター)

私は平成 11 年から普及の立場から生物的防除の指導をしています。本吉地方では春期冷涼なため、イチゴの収穫期間が長く、防除期間が長くなるため、化学合成薬剤から防除効果が持続する天敵に切り替えたいという農家が増えている。昨年まで生物的防除の展示圃を引き受けていた農家が今年から種々の天敵(チリカブリダニ、ククメリスカブリダニ、オンシツツヤコバチ、コレマンアブラバチ)を購入し、普及センターと相談しながら有機栽培型の農業を進めている。

天敵によりイチゴで生物的防除を実施する場合の問題点として、①害虫に対する殺滅的な効果が得られないため、生物的防除の継続

を農家に理解させにくい(発生量と被害量の関係の解析が必要)。②天敵やミツバチに影響のない化学合成薬剤が少ない(すでに多発してしまった場合や発育ステージを揃えるため、またスポット散布のために、殺虫剤の全面散布が必要な場合がある)。③病害の防除にも化学合成薬剤が必要。④色やフェロモン等に誘引されない微小害虫を予察できない等がある。農家に生物的防除を指導する場合、最も重要なのは化学合成薬剤と天敵製剤を適時的確に使用させることである。ハウス毎に異なる病害虫の発生を的確に予察し、適時に薬剤の散布を指示しなければ、信用を失墜する。

## イチゴにコブノメイガ？

石川敏男(足利市いちご研究会)

天敵の試験で失敗の原因がヨトウムシ対策の薬剤による残効とわかって様子見していたら、3年経ってしまった。耕種的防除やIPM薬剤の選定をしているうちに、コブノメイガがハウスに侵入するようになってきた。当初同定できず、ニカメイガかなと思っていたが、ヨトウムシ防除をした翌日に侵入しているので、とても天敵など使えないと思っていた。

昨年、県の病害虫防除所に同定してもらい、コブノメイガはイチゴを食害しない、食害葉はヨトウムシによるものといわれた。その前に面白い体験をした。ある漢方農剤とアデオン、DDVPを夕方混用散布したところ、翌朝コブノメイガが千匹単位でハウスに入り込んで飛来していた。ヒッチコックの「鳥」のようで気味悪いほどだった。防除所とメーカー

一へ伺いかたがた報告した。幸い 4, 5 日で死んでくれたが内心冷や汗ものだった。

農家にとっては、害虫が何で、その生理生

態を理解できるように関係機関に教育してもらいたいものだ。

## カメ虫騒動

横須賀知之(茨城県農業総合センター農業研究所)

先日、TVアニメの「ちびまる子ちゃん」で「カメ虫騒動」というのを放送していた。主人公まるちゃんが、カメムシとは知らずにアカスジキンカメムシを集めたことから、手に臭いが染みついてしまい、大騒ぎになるという内容だった。(甘いぞ、まるちゃん。俺なんか、毎日カメムシ手づかみさ。おまけに吸虫管で幼虫を吸いまくっているんだ。)まるちゃんの父・ヒロシ曰く「カメムシなんてのは、元々おとなしい虫なんだ。いじりまわすのが悪いんだ。」(いいこと言うぜ、ヒロシ。)

数年前の果樹カメムシ騒動や昨年の斑点米カメムシ騒動など、本来おとなしいはずのカメムシを害虫化させてしまったのは、人間

がいじり回したためではないかと考えさせられてしまった(これはどの病害虫にも通じることであろうが)。さらに、収量や味覚など本質的な部分とは別の、単に外観上の傷の有無が問題となってしまうので話がややこしくなる。(斑点米が数%混入していても、米の味には影響はないと思う。)そういう部分を整理できれば、カメムシ騒動もそう起こらないで済むと思うのだが... (「甘いぞ、横須賀」という声が聞こえてくる)。

いつの日か、おとなしい彼らと共存できる日はやって来るのだろうか。その前に、今年も水田でクモヘリカメムシまみれの毎日がやって来るのは明らかであるのだが。

## ムシできません

湯浅和宏(滋賀県農業総合センター農業試験場)

田植えも一段落ついた五月晴れの昼下がり、ほっと一息畦畔に腰を下ろし、何気なく目の前を横切るホソハリカメムシ。今年も現れましたね。もう休憩どころではありません。じっと目を凝らして観察してみると、ホソハリよりも小型かつ俊敏な動き、背中には赤いスジが入ったカメムシ、それよりもさらに小さく赤いヒゲを備えたカメムシもやっぱり、いました。滋賀県では 98, 99 年と斑点米カメムシ類が多発しました。これまで本県の主要な斑点米カメムシ類はホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、トゲシラホシカメムシの 3 種でした。ところが、この 2 年間で急激に増

加したカメムシ類がいます。それがこの動きの速い、小さな 2 種のカメムシです。本県においてもその対策が求められています。休憩のさなかに目に入っても全くムシできない存在です。

さらに、この 2 種のカメムシについての問題がもう一つ。彼らにつけられた名称のことです。斑点米の原因となるくらいのカメムシ類ですから、予報や注意報等で県民に情報提供をする際にカメムシ類の種名を避けて通ることは困難です。しかし、差別的な用語が含まれており、それが印刷物となりまた指導者が用いることは妥当ではありません。現在の

ところ滋賀県においてこの問題に対する議論はまだ十分になされているとはいえません。学会等で統一的な見解が示されればいいので

すが……。ムシの名前だからしょうがない、と言ってムシできない問題です。

### 三浦半島で話題の害虫，ネギアザミウマ

布川美紀(神奈川県横須賀三浦地域農業改良普及センター)

昨年から、神奈川県三浦半島で最も話題となっているのはネギアザミウマです。3年前からだと思いますが、春キャベツの外葉にいるアザミウマは何だろうか？ それを、あつと言う間でした。昨年の夏、スイカ、トウガン果実にまるで「風すれ」をおこしたような被害と、圃場によってはスイカの芯が止まるといった被害を出しました。続いて冬、発生の多い地区では播種したダイコンが芽を出したとたんに寄生を受けて生育不良。キャベツ

は縮れて生育ストップ。冬の間、個体数は減少したものの、0になることなく、夏作へと突入しました。農協の有線放送を通じて、再三、防除を呼びかけているところですが、どの薬剤で防除していくかについては現地の農家さんと共に悪戦苦闘中です。現在、カボチャに発生が認められます。夏作では、通常、粒剤の植穴処理が行われていますので、急激に問題化することはないとは思いますが、今期は無事に乗り切れるのでしょうか。

### パラグアイにおけるトマト黄化えそウイルス媒介アザミウマ種の特定

桜井民人(東北農業試験場害虫発生予察研究室)

1997年より始められた国際協力事業団のプロジェクト「パラグアイ小農野菜生産技術改善計画」に、当地におけるトマト黄化えそウイルス(以下TSWV)の媒介アザミウマ種を特定せよとのお達しで、2000年1月末より3月はじめまで短期専門家として派遣されました。パラグアイは日本とは季節・時差とも丁度逆になるため、この時期は最高気温が38度を超える日もある上、時差ボケも重なり、最初の一週間はあまりよく眠れませんでした。とはいえ、さすがに南米の人々は陽気で、私も次第にハイテンションになり、最初に思ったよりも多くの成果をあげることが出来ました。

TSWVによる農作物の被害は世界的に問題になっていますが、パラグアイも例外ではなく、特にトマトでは、収量ゼロに近い農家

もありました。このウイルスは媒介昆虫によってのみ伝搬されるため、その防除のためには主要な媒介者を特定し、効果的にそれを駆除することが有効です。そこでまず、トマト圃場で頻繁に見られるハナアザミウマの一種 *Frankliniella schultzei* に標的を絞り、そのウイルス媒介特性を調べました。すると、野外圃場から採集した成虫からTSWVタンパクの存在を示す反応が現れ、この種がTSWVを体内に獲得し維持できることが分かりました。さらに、別に採集してきた成虫に、健全植物を個別に摂食させたところ、約20%の個体がTSWVを伝搬しました。次に、このアザミウマによるTSWV伝搬の潜在能力を調べるため、すべての個体にウイルスを獲得させた後に、ウイルス伝搬虫率を測定したところ、約80%でした。これまでに報告されてき

た *F. schultzei* の伝搬能力に比べてこれはかなり高い値であり、パラグアイではこの種が TSWV の要注意ベクターであることが明らかになりました。また、このアザミウマの繁殖能力は高く、世代も早く進むため、薬剤抵抗性が発達しやすい可能性も示唆されました。

上記の成果は、パラグアイ国立農業研究所

の研究者（カウンターパート）の方々に技術指導をしながら、彼らと共同で明らかにしたものです。この成果を元に、当地でさらに TSWV 防除のための試験が繰り返され、私の仕事が少しでも現地農家の役に立つことを願って止みません。

## 土着天敵利用技術研修会満員御礼

林 直人(社団法人日本植物防疫協会)

近年土着の天敵を保護利用しようという気運が高まっていますが、このためには指導機関の知識と経験が不可欠となります。しかしこの分野は書物・文献も多くなく現場では苦慮しておられると思います。日本植物防疫協会では、この分野で豊富なキャリアをお持ちの元果樹試験場の高木一夫氏を技術顧問としてお迎えしたことから「土着天敵利用技術研修会」を昨年より開催しております。やはり上記のような悩みは多いらしく、定員を大きく上回る応募があり、講義のみの講習会は急遽広い会場を確保して対応することとしました。しかし実習を伴うコースは人数が多すぎると目が行き届かないこと、機材を使える頻度が下がるためかえって不毛な研修会となりかねないことなどから定数を増やせず、多くの人をお断りせざるを得なくなりました。このレターをお読みの中にも落選された方がおられると思います。どうか事情を察してご了承ください。

国をあげて環境に配慮した農業づくりを進めているところですが、これに伴い農薬の種類・使用法の変化そして土着天敵の利用等の影響で、農業生態系が変化するにつれて発生する害虫層も変化し、これまで害虫として問題とならなかったような種が害虫化するような例もでてきているようです。農業に関わる人々はこれらの新知識をこれまで以上のハイペースでどんどん吸収せざるを得ない状況にあることから、今回のような講習会のニーズは高まっていることと考えられます。今回の応募状況を見て、我々もこれらのニーズを的確に反映した企画をさらに実施し、これからの農業に貢献しなくてはと改めて考えさせられました。その中においても当農林害虫防除研究会は、害虫の分野に限られますが、最新の情報をお持ちの方々が一堂に会し情報交換できる場ですので、有効にご活用いただけたらと考えるところです。

## IPM における化学農薬の課題

藤本博明（住友化学工業株式会社）

環境保全型農業の推進が叫ばれる昨今、各地で IPM 体系の現場への導入が盛んに検討されているが、こうした動きをみていると、IPM の概念が少し変わってきたのではと感じ

るを得ない。最近の検討事例では、IPM 体系のメリットは、化学農薬の使用量が既存の防除体系に比べどれほど削減されたかを第一義として評価されることが多いようで、環境保

全=化学農薬減らしとの捉え方によるものなのか、消費者に対するイメージアップを最優先させるためなのか、Cost/Benefit や Risk/Benefit の観点からの評価はあまり聞こえてこないように思える。IPM が多くの防除手段を組み合わせるアプローチであり、経済的評価を必須とするならば、各防除手段の Cost 面や Risk 面でのメリットが正当に比較検討されるべきで、広スペクトル殺虫剤は IPM に適合不可であるとか、天敵ならば全く環境影響なしというような短絡的な評価は見直しが必要かと思う。

IPM の捉え方が立場ごとにやや異なるにせよ、IPM は様々な立場から推進されるべきであろう。農薬メーカーである当社も、多様な防除手段を提供すべく生物農薬の開発にも近年注力しているところであるが、それ以上に「化学農薬を IPM にどう適合させていくか

」が大きな課題である。新剤開発にあたっては、選択性のあることが今や必須条件であるが、どこまでの選択性を求めるかが、技術面および開発費/市場規模の面から難しい問題となっている。一方、既存剤については、IPM に適合する使用方法を検討することが最重要の課題である。既存剤は概して天敵への影響が大きいため、これまで IPM においてはほとんど取り上げられていないが、同じ作用機作を持つ殺虫剤の連用や過剰使用をさげ、効果面や経済面でのメリットを生かすことを考えるならば、既存剤についても IPM への活用を是非考えるべきと思う。生理的な選択性に留まらず、時間的、空間的などの選択性を創出する使用方法は必ずあるはずであり、指導機関の方々のご協力とご指導を賜りながら、検討していきたいと考えている。

## 地域によるコナジラミ類の優占種の違い

太田光昭(静岡県農業試験場)

静岡県内のトマト生産者に対して、「最も防除回数が多い対象害虫は何ですか。」という質問を投げかけると、必ずと言って良いほど「コナジラミです。」という答えが返ってくる。ご存じのように、我が国の施設栽培で発生が問題となっているコナジラミには、オンシツコナジラミ (Tv) とシルバーリーフコナジラミ (Ba) の 2 種が存在する。しかし、多くの場合、彼らの認識としてはただ単に「コナジラミ」という種類の害虫なのであって、この 2 種の区別をちゃんと考慮している生産者は残念ながら少ない。

殺虫剤の中には、2 種コナジラミに対して効果の程度が異なるものが存在することが知られている。また、コナジラミ類の生物的防除資材であるオンシツツヤコバチは、適切な条件下で使用した場合、Tv に対しては確実に

高い効果を示すが、Ba に対しては十分な効果を示さないことが少なくない。したがって、発生しているコナジラミ類の種を的確に把握することは、使用する防除資材を選択する上で極めて重要であると考えられる。そこで、抑制栽培が主な作型となっている、本県内のある主要なトマト産地において、2 種コナジラミの構成割合を 9 月から翌年の 1 月にかけて調査してみた。その結果、高々 10km 四方の範囲内に、Ba が一貫して優占種として推移する地域と、優占種が Ba から Tv へと変化する地域と、Tv が一貫して優占種として推移する地域とがパッチ状に混在していることがわかった。

以上のことから、本県の場合、トマトにおけるコナジラミ類の防除プログラムは、各地域ごとに発生種の違いを考慮して策定する必

要があると考えている。

## ケナガコナダニ属のダニによるハウレンソウ加害の現状と防除の方向性

春日志高(千葉大学)

ハウレンソウを加害するケナガコナダニの研究を始めて4年になるが、最近、これらのダニに関する問い合わせの増加を実感している。昨年度、農業試験場、防除所および農業改良普及所の協力のもとに行った被害実態調査の結果(日本ダニ学会誌 9:31-42 に掲載)からも、全国的に被害が増加傾向にあることが証明された。主要加害種のハウレンソウケナガコナダニは土壌表層および浅層に大部分が生息するが、一部の個体が主に春と秋にハウレンソウの新芽に寄生する。そして被害された新芽は成長すると奇形となり商品価値が著しく低下する。土壌やハウレンソウの新芽に生息することや加害時期と被害発見に時間

差があるため、栽培中の薬剤散布による防除は極めて難しい。ケナガコナダニ属のダニの被害は同地域の農家間で著しく異なることから、有機質肥料の質や量の違いや、微妙な栽培形態上の違いがダニの発生に大きく影響していると考えられる。したがって、今後のダニ管理を考える上で発生を抑える環境づくりが課題となろう。しかし、当面は少なからず薬剤に頼らざるを得ない。前述の通り散布剤による防除には限界があるため、播種前に土壌混和するタイプの薬剤に期待したい。今後そのようなタイプの薬剤のケナガコナダニ属ダニへの登録拡大が望まれる。

## イチジクヒトリモドキの発生及び被害の初確認

大政義久(愛媛県立果樹試験場生産環境室)

1999年9月に愛媛県内の農家は場においてイチジクの新葉を食害している毛虫が採集された。これから10月下旬に成虫が得られ、イチジクヒトリモドキ *Lacides ficus* (Fabricius) であることが判明した。これと相まって、松山市内のイチジク栽培園を中心に周辺部の家庭栽培樹まで葉の食害がみられ、10月下旬に行った県下全域の被害調査では松山市を中心とする中予地域で被害が激しく、調査29ほ場のうち23ほ場(79%)で、また、県東部(36園調査)の今治市や伊予三島市でもそれぞれ1園地づつの発生が認められ、被害は広域に及んでいた(愛媛県発生予察特殊報第4号, 1999)。

本種は沖縄県以南では土着しているといわ

れるが、九州以北では偶産蛾とされている。成虫が、古くは1962年に静岡県浜松市で、1980年代に入って、鹿児島市をはじめとして熊本市、福岡市、大分市など九州地域で採集された記録がある(宮田1988北九州の昆虫; 井上1982日本産蛾類大図鑑)。

幼虫は若い葉を好み、若齢期は群生して、葉裏から表皮を残して食害する。中齢以降は分散し、葉脈を残して葉の大部分を食い尽くす。葉が少なくなると果皮も食害する。老熟すると体長は約40mmに達し、やがて樹を降り、土中の浅いところに土繭を作って蛹化する。

今回の発生は時期が遅かったこともあり、ほとんどの農家では収穫を終えており、実害



はなかった。しかし、本県での越冬の可能性は低いと思っていたが、蛹で露地越冬してお

り、今後、害虫化しないかと懸念している。

## 広がる総合防除を応援します。

松本 学(社団法人農山漁村文化協会)

農文協発行の病虫害の加除式出版物には『農業総覧 病虫害診断防除編』と『農業総覧 病虫害防除・資材編』の二つがある。前者は31年目、後者は6年目の追録を迎える。病虫害防除が総合防除の確立に向けて大転換しているなか、ともにそれに向けて全面再編成を開始している。『防除・資材編』では第11巻「土着天敵・天敵資材」を新設した。「総合防除の考え方と実際」も、今年追録(第6号)も含め、ここ3年で23作物36タイプが揃う。わが国の病虫害関係研究者の力量に、いまさらながら感心させられている。

気になることがひとつ。「IPM」、「総合防除」はそれなりに歴史のある取り組みだが、農薬に代わる個々の防除手段を組み合わせるだけで「総合」といえるだろうか。

今年の『現代農業6月号』「主張」では、「土着天敵や土着微生物、天敵に影響のない農薬の利用によって、害虫、病気、雑草防除と施肥・土づくり、栽培法、周囲の圃場環境整備などを統合し、各地域で『減農薬空間』を作り上げよう」と提起している。「減農薬空間づくり」－「IPM」にとって代わりようとは思わないが、少し、はやらせようと思う。

## 今思うこと

大久保宣雄(長崎県果樹試験場病虫害科)

今年4月から4年ぶりに果樹関係の仕事に復帰することになった。4年前まで24年間果樹を専門に仕事を行ってきたので、総合農林試験場での2年間の野菜の害虫研究には実のところ、本腰の入らない期間で、本格的な研究を行ったとはいえず、残念であった。その後2年間は企画調整と諫早湾干拓の仕事に追われ、研究どころではなかったが、それでもその期間に経験し得た事柄は多岐にわたり、また一般の病虫害関係者ではとても会えそうもない広範囲の分野の人と知り合いになった。このことは今更とはいえ、人間形成に大いに役立ったと自負している。このような経緯から以前と同じ職場に戻った訳であるが、なぜかファイトの湧く気持ちになれない点が自分ながら気がかりである。企画調整を兼務する

ことや年齢も1つの要因であるが、それよりも4年間のブランクの大きさがあってそうである。ただし取り組んでいる課題は基本的には昔とほとんど変わっていないというか、最近では昔の繰り返しをしているようでもの足りず、もっと別の視点に立った問題意識が必要と痛感している。その点で取り組もうとしている問題があまりないと言うと語弊があるが、没頭できるようなテーマに会わないことも原因なのかもしれない。それと昨今の県の研究機関における人事異動の激しさがベテランをなくし、共通の問題ができる人材に乏しくなっていることも原因かもしれない。

それやこれで最近の愚痴を聞いて頂きたい。多分どこの県の試験研究機関も共通の悩みではないかと思う事柄である。大学や国の機関

と違って都道府県の試験場では最近在籍5年程度で異動させられる例が多くなっていわゆるベテランがいない状況となっている。若い研究員は情報収集の才能というかパソコン操作に堪能しているというか、あらゆる情報には明るい、それを活かすことは不得意である。例えば現場からの問い合わせに対する解答は参考書の受け売りであって先方の求めに答えていないことが多い。課題に縛られてそれをこなすのが精一杯で余裕がないことが臨機応変の対応を困難にしている。そのあらわれか最近では実験台はいつもきれいで、昔のようにシャーレで溢れている光景はついぞみたことがない。争ってその場所を確保した時代が懐かしい。その点現在は無駄なと思われるような仕事というか遊びというか、様々な

角度の検討が不足している。これは人材育成の大きな壁となっている。ではどうしたらいいかと言うと妙案はない。若い研究員にはなるべく雑用をさせず、担当課題も少なくして余裕を持たすことが大切ではないかと思うが、現実には少ない人員で多くの課題を抱えているため、難しい。また課題を少なくすることは人員削減にもつながるのでおいそれとはできない。あれやこれやでお先真っ暗のようにみえるが、若い優秀な人材も育っている都道府県もあるのでそれらの県に人材育成のノウハウをご教示願いたいところである。

以上とりとめもないことを書いてきたが、これは地方機関の一部の例で、少なくとも大学や国のことでないことを申し添えます。

## これも異常気象？！

中村元太(ダウ・ケミカル日本株式会社)

スピノエース顆粒水和剤の上市が一段落つき、2年ぶりに福岡にある開発センターへ復帰する事になりました。久しぶりに圃場に出てみて驚いたのは、異常にアブラムシが多い事です。圃場のキャベツとナスにはモモアカ、ワタ、チュウリップヒゲナガといったアブラムシがベタベタとついていきます。約10年同じ圃場で試験を行ってききましたが、こんなにアブラムシが大発生したのを見たのは初めてです。近所の農家の人に聞いても、今年はほとんどの野菜や果樹でアブラムシが大発生し

ているとの事。ある試験場の先生によるとトラップにかかるアブラムシの数は例年の3倍になっているそうです。その代わりといっちはなんですが、例年よく見られるコナガやアオムシがほとんど見られません。例年連休明けにはキャベツ畑を乱舞するモンシロチョウも、今年はいっこうにあらわれません。たぶん、久しぶりに冬が寒かった事、春になってからもあまり気温が上がってこない事が原因ではないかと思うのですが…。皆さんどう思われますか？

## ネギハモグリバエ防除に救いの手を!!

甲斐 伸一郎(大分県農業技術センター)

本県では近年、小ねぎの施設栽培が盛んになっており、1998年の県内における農協共販額ではいちごに次ぐ品目となっています。こ

れに呼応するように、白ねぎでは問題とならなかった害虫による被害が大きくクローズアップされてきました。ネギハモグリバエです。

なんだと思われるかもしれませんが、これがまたなかなかのものです。ご承知のとおり小ねぎ栽培は、播種から収穫までが夏期の高温時であれば60～65日程度と短く、年間4作程度行うため、十分な土壌消毒の期間がとれません。加えて有効薬剤が少なく、安全使用基準との関係で使用薬剤も制限されるため、一度発生すると手が着けられなくなってしまう。昨年は台風の直撃によりハウスが被害を受けたうえに、その対応に手を焼いている間にネギハモグリバエが大発生し大きな被害を受けた農家もありました。このように県内の小ねぎ産地では、ネギハモグリバエが難防除害虫になっており、各産地から防除対策の確立についての声も多く、当農業技術セン

ターは昨年度から試験研究に取り組んでいるところです。しかし、ネギハモグリバエについての生態や防除等について過去の文献を調べたところ、その数のあまりの少なさ（単に検索ができていないのかも。）に、「やはりマイナーな害虫なのかな？。他の産地では問題となっていないのか？。ではどのような防除対策をとっているのだろうか？」と自問自答する毎日です。

マメハモグリバエに対する最新の研究を応用すればこと足りるのではとの考えも持っています。せつかくの機会ですから、ネギハモグリバエにおける文献や防除対策、現地での対応等諸先輩方のご知見、助言をいただければ幸いです。

## ネギアザミウマによるカキの被害

森下正彦(和歌山県農林水産総合技術センター果樹園芸試験場紀北分場)

カキでは、着色時期にミカンキイロアザミウマによる果実被害が知られていたが、1999年8～9月に和歌山県北部の一部のカキ園でネギアザミウマによる果実被害が発生した。被害の様相はミカンキイロアザミウマに似ており、程度が軽い場合は両者でほとんど区別がつかない。しかし、ミカンキイロアザミウマでは成虫が果実着色期に飛来し、成虫が主に加害するのに対して、本種では着色以前にも加害され、幼虫が主体であり（多い果実では50頭程度）、被害が激しい場合は生理落下を起す違いが認められた。やっかいなことに、

この個体群は合成ピレスロイド系薬剤に対して感受性が低下しており、そのことが被害を拡大させた（有機リン剤等には感受性が高かった）。

鹿児島県や愛媛県のハウスミカンでは、近年ネギアザミウマによる果実被害が増加しており（水島、私信）、また1999年に和歌山県のウメで本種による新梢被害を受けた（中、私信）。ネギアザミウマはもともと多くの植物を加害するが、このように果樹に対する加害が近年増加している要因は明らかでない。しかし、今後その発生に警戒が必要と思われる。

## シバを加害するナガチャコガネの防除

田中 篤(鳥取県園芸試験場環境研究室)

鳥取県は、屈指のシバ生産県ですが、コガネムシ類による根部の食害が問題となりました。加害種を調査した結果、これまで防

除対象となっていなかったナガチャコガネによる被害が大きいことが明らかとなり、その防除対策を検討しました。

ナガチャコガネ成虫は5月下旬から地上に現れ、交尾を行います。この時期のダイアジノン粒剤散布は、成虫に対する殺虫効果が認められ、その後の幼虫密度の低下にも有効であることから、現在は一斉防除を行っています。また、多発ほ場は成虫期の防除だけでは不十分なため、幼虫が地表近くで食害する10月中旬～12月に、MPP乳剤等のかん注を行っています。このような防除を行った結果、

最近ではナガチャコガネを探すのが難しくなっていました。

しかし、現地ではより簡便で効果の高い方法が望まれており、現在はさらに効果の高い薬剤による防除を検討しています。また、この防除体系はウスチャコガネには効果が低いため、その対策も必要となつていますが、なにより一番の問題は不景気のためシバの需要が少ないことです。

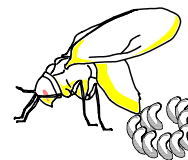
## ついにトマト黄化葉巻病の発生が・・・

行徳 裕(熊本県農業研究センター)

トマト黄化葉巻病 (TYLCV) は、1996年に長崎県と静岡県、愛知県で発生した新ウイルス病である。本病はシルバーリーフコナジラミによって媒介されるウイルス病で、トマトの生育を阻害し、著しい減収となる。発生以来、熊本県への侵入を警戒していたが、1999年9月、ついに熊本県で発生を確認した。被害は、シルバーリーフコナジラミが多発する8～9月定植の作型で大きく、定植直後に栽培を断念したほ場もあった。同じ時期に佐賀県と福岡県で発生が確認されており、保毒苗の移動や風による保毒虫の分散により分布が急速に拡大したと考えられる。熊本県では発生地域が有明海に面した平野部に集中

しているため、「保毒虫が有明海を越えて飛来した。」と一部で囁かれているが、真偽は不明である。

シルバーリーフコナジラミの発生が減少するため、昨年11月以降の発生は小康状態にある。しかし、夏に向かいシルバーリーフコナジラミの密度が高まるため、被害や分布の拡大が危惧される。



Illustrated by Y. Gyotoku

## 常任幹事会報告

### 第10回農林害虫防除研究会常任幹事会議事録

日時：平成11年12月17日(金) 14:30-17:00

場所：婦人総合センター「あざれあ」4階第1会議室(静岡市)

出席者：宮田 正、古橋嘉一、坂井道彦、平井一男、廿日出正美、平岡行夫、本山直樹(オブザーバー：増田俊雄、西東 力)(欠席者：池田二三高、池山雅也、後藤哲雄、佐藤仁彦、林 直人、正野俊夫、根本 久、濱 弘司、井上雅央)

議題：

1. 第9回議事録(案)の確認  
一部修正の上、確認した。

## 2. 研究会第5回大会について

当日配布された増田試案に基づき議論した。その結果、第1日目については「北日本における話題の病害虫」というようなテーマでシンポジウム（3題程度）を行うこと、第2日目にも、微生物殺虫剤関連で特別講演を持つこととし、さらに大会開催県で検討していただくこととした。また、大会は平成12年6月29日（木）～30日（金）に仙台市戦災復興記念館記念ホールで開催すること、懇親会は勾当台会館で行うことを了承した。

## 3. 会の運営について

- (1) 平成11年度農林害虫防除研究会総会記録（案）を一部修正の上、確認した。
- (2) 平成11年度決算報告案について、別紙資料により報告があった。
- (3) 次期常任幹事の選出について議論し、常任幹事の選出に当たっては、所属分野、地域（幹事会への出席）などを考慮し、以下の候補者を常任幹事として選出した。候補者には常任幹事になっていただけるかどうかを確認することとした。平成12～13年度常任幹事候補者：古橋嘉一（会長）、坂井道彦（副会長）、浜村徹三（副会長）、池田二三高、井上雅央、佐藤仁彦、正野俊夫、根本久、廿日出正美、濱弘司、林直人、平井一男、平岡行夫、本山直樹、宮田正、小林壮一、阿久津四良、江村薫、神山洋一、梶原治、河野義明、増田俊雄、松井正春、後藤哲雄
- (4) ニュースレター第4号の発行について別紙資料により平井編集担当常任幹事より説明があった。

## 4. 会の英文名称について

先の総会で、本研究会の英文名称については、次回ニュースレターなどでの議論を通し、来年度の総会で決定するという事になっているので、ニュースレター第4号で、再度関連の記事を載せることとした。

# 農林害虫防除研究会会則

（名称）

第1条 本会は、農林害虫防除研究会と称する。

（目的及び事業）

第2条 本会は、農林害虫防除に関する国内外の研究と技術に関する情報の交換を行い、会員相互の知識の高揚と親睦を通じて、農林業の発展に寄与することを目的とする。

第3条 本会は、目的達成のため次の事業を行う。1. 集会の開催、2. ニュースレターの発行、3. 調査研究、4. 情報交換、5. その他必要と認められるもの

第4条 本会の事務所の所在地は常任幹事会で承認を受けるものとする。

（会員）

第5条 本会の会員は正会員、賛助会員とする。

第6条 正会員は農林害虫防除の専門家および本会の趣旨に賛同して入会する個人とする。賛助会員は本会の活動を賛助するため入会した団体、機関、個人とする。

（役員等）

第7条 正会員ならびに賛助会員は別に定める年会費を納付するものとする。

第8条 本会は次の役員をおく。1. 会長1名、2. 副会長2名、3. 幹事若干名、4. 会計監査2名

第9条 役員任期は2年とする。ただし会長は重任することはできない。

第10条 本会は、常任幹事若干名をおく。常任幹事は会長、副会長とともに常任幹事会を構成し、

常時会務の執行に関し審議に応じる。

第11条 幹事は幹事会を構成し、本会の会務一般について評議する。

第12条 本会は編集委員，その他の専門委員をおくことができる。

(集会)

第13条 集会は総会，研究会などとする。総会は原則として年1回開催する。

(会計)

第14条 本会の経費は会費，寄付金，その他によってまかなわれる。

第15条 本会の会計年度は毎年1月1日に始まり，12月31日に終わる。

(付則)

第16条 本会則の変更は総会の議決による。

第17条 この会則は平成8年6月22日より施行する。

## 研究会への入会方法

年会費 1,000 円を振り込み（郵便振替：農林害虫防除研究会 00810-0-82999），申し込んでください。申込受付後，News Letter をお送りします。会計担当は廿日出正美（静岡大学農学部生物生産科学科，〒422-8017 静岡市大谷 836，TEL：054-237-1111 内線 7416）です。現在の会員数は約 300 名です。事情により退会の場合は上記会計担当まで氏名，所属等をご連絡ください。

## 編集後記

平井一男さんを引き継ぎ，News Letter No.5～8 の編集は田中 寛（大阪府立農林技術センター病虫室，〒583-0862 羽曳野市尺度 442，E-mail：hiroshi-habikino.tanaka@nifty.ne.jp，TEL：0729-58-6551 内線 232，FAX：0729-56-9691）が担当します。No.5 は，農家，改良普及員，企業，団体，都道府県・農水省試験場，大学など，バラエティーに富んだ方々からニュースをいただきました。投稿して下さったみなさん，ありがとうございました。

No.6 は 2000 年 12 月に発行します。ニュース投稿は上記担当がいつでも受け付けます。あなたやあなたの institute の現在の仕事や問題，害虫の話題，本会のポリシーなどについて自由に，気軽に楽しく書いてください。エッセイ，ノート，ほか，どんな形式でもかまいません。字数の目安は 400 字程度ですが，字数にこだわる必要はなく，200 字でも 1,000 字でも OK です。同じ人が No.5，No.6，No.7，…，に続けて投稿するのももちろん OK です。

投稿方法は，(1)電子メール直接書き込み，(2)電子メール添付ファイル，(3)フロッピーディスク郵送，(4)手書原稿ファックス・郵送，の順に歓迎します。なお，手書原稿でも全く遠慮はいりません。ワープロソフトは，Windows 版の(1)Word，(2)一太郎，(3)Ms-Dos テキスト，を歓迎します。1 ページ行数・1 行文字数など，スタイルは自由ですが，英数字は全て半角に，句読点は「，」「。」，にしてくださいと助かります。今回は行徳さんからコナジラミのカットをいただきましたが，こういうカットも大歓迎です。「Illustrated by あなたのお名前」を付記します。

古橋さんの巻頭言にしたがい，農林害虫防除研究会 New Letter を「現場から基礎までのあらゆる井戸端情報が飛び交う舞台」にもっともっとうとしていきたいと思ひます。メンバーのみなさん，どうぞよろしくお願ひします。